

## 趣旨説明——生命概念の再検討——

金子 昭

「思想としての生命」というテーマ自体、今日の生命科学の進展と無関係には語れない。生物学は、分子レベルから生命の仕組みを解明することに成功し、また脳神経科学は、理性の座であった精神を、脳の働きとして詳細に解明しつつある。さらにこれらの生命研究を促進しているのが情報科学である。コンピュータを駆使して、遺伝子情報の解析を行ったり、生物進化の過程をシミュレーションしている。

このような動向が人間生命をも人為的に操作できる対象とする一方、しかし、そうしたことを行う人間主体は、あいかわらず対象化された生命の外側に立っている。そこで露わにされるのは、自らも与えられた生命でありながら、その生命を操作していくという人間存在の矛盾した有り様である。ここで今一度、生命というものを思想の問題として振り返って考え直してはどうだろうか。これが、この連続パネルのねらいである。

三回シリーズの第一回（二〇一四年）は「出生と生命」について取り上げ、生命が与えられる出来事に着目して、その人間的な意味や生命倫理的な問題を取り上げた。三回目（二〇一六年）は「死をめぐる生命」について論じる予定であるが、今回の第二回（二〇一五年）は、出生と死の間にあつて、「生きている」ことそれ自体の思想的含意を問うことになった。

生命をして生命たらしめるものはいったい何か、また、それを自覚している私という生命とは何者なのか。これはすぐれて哲学的な問いである。とりわけ、近年の心の哲学や生物の哲学で行われる、物質と精神、物質と生命の境界領域に関する議論が知らず知らずの内に物理主義的な枠組みになっている現状において、本パネルでは、こうした枠組みをもうディカルに考え直そうとする。

今回は、理学的分野で独創的な生命科学研究をしている郡司

ペギオ幸夫氏をお招きし、人文学を中心とする比較思想学会の場において、生命そのもの問題に関して、お互いにどう思想的に切り結んでいくことができるか、いわば学問的な他流試合を試みたことになる。

郡司氏は、独自の内部観測理論の立場に立ち、生命を不完全な外部に対する「観測担体」であると位置づける。このように見たとき、生命とは、「モノとコトの齟齬を反故にする表現体」となる。モノが再帰構造体系、すなわち部分・全体の双対性を持つ体系の全体であるとすれば、コトはこの構造体系を包括しその外部に広がる意味や延長に徹底した外部・他者を指す。そして、コトとモノの接続にこそ、自己組織化や創発が出現し、それが生命として表現できる現象となるという。

一方、冲永宜司氏は、とくに創発の概念に着目し、そこから生命が生命でありうるゆえんを哲学的に読み解こうとした。自己組織化を行う有機体の内部では、物質が絶えず流動し、入れ替わっている。ここに物質を超えた生命としての創発を見ることができる。また、例えば同じ形態的特性を持つ眼の進化が系統を異にする生物間で独立して生じた原因として、生物進化における創発が想定される。そして、意識のないところに意識が生じたという意識の創発の問題もある。さらに次なる段階で、もしかしたら既存の意識とは異なる何かへと創発していく可能性もあるだろう。冲永氏は、こうして創発の新たなステージを一つひとつ論じながら、その問題構造を掘り下げていった。

郡司・冲永両氏の発題を受け、コメンテータの中山剛史氏は、脳科学と哲学のインタラクションに関わる学際的研究の成果を踏まえて、生命をめぐる問題の論点を整理し、思想としての生命の問いに深く迫った。

一連の発題や議論の過程を通じて、あらためて生命とは何かと考え直したとき、私には生命探究が、自己遡及の逆説に座礁しつつも、それが反転し裏返って新たな展開になるという、一種のクライインの壺のような構造になるように思えてならない。いや、生命そのもの、とりわけ人間的生命自体が実はそうした構造を有しているようにさえ見えてくる。

全体と部分、主観と客観は、それぞれ固有の姿を保ちつつも、互いに入れ子構造を持つ。それが「いのち」発現の場となり、同時に場に発現する「いのち」となる。モノとコトはかくして齟齬することなく接続し、そこに次元を新たにする局面が登場する。これが創発という現象ではないだろうか。物質からの生命の出現、生命過程における進化、また意識の登場も、そうしたダイナミックな「いのち」の姿であるように思われる。

そして、何よりも重要なことは、我々もまたその「いのち」を生きているという根源的事実であり、それゆえ、その根源的事実を常に畏れと敬いの念をもって受け止める姿勢こそ生命探究の要としていかなければならないのである。

(かねこ・あきら、倫理学・哲学的人間学、  
天理大学おやさと研究所教授)